

第3回文化が活きる京都推進審議会 開催概要

1 日 時 令和8年8月3日（月）14時から16時

2 開催形式 オンライン会議

3 出席者 審議会委員18名出席（欠席2名）

4 議事要旨

- ・金田会長が議事進行
- ・報告事項について事務局から説明の上、意見交換

5 主な意見等

- ・関西広域連合のアートコミュニケーションプログラムは、アートが人に与える影響や文化施設に求められる役割について共有する有意義な機会となったと感じている。
- ・文化施設に対する社会的期待に応えるため、具体的にどのような実践が必要かを関係者間で共有できたと考えている。
- ・自身のいけばな体験を通じて文化の魅力を実感しており、年齢に関係なく文化に触れる機会を広げることが重要であると感じている。
- ・地域祭礼では子どもの参加意欲はあるものの、指導者不足など大人側の事情によって継承が難しくなっていると感じている。
- ・丹後地域に残る太刀振りについて、地域横断的な調査・研究を行うことで新たな発見につながるのではないかと考えている。
- ・文化によるウェルビーイング向上プロジェクトについて、大学との連携体制や役割分担に関心を持っている。
 - 事務局）・関西広域連合の取組の一環として、京都府、京都市、京都大学、文化体験を提供する文化事業家を支援する団体等との実行委員会形式により、民間企業とも連携し、文化体験の実施及び効果検証を実施した。
 - ・文化事業家支援団体が文化体験の調整を、京都大学等がアンケートやインタビュー調査を実施し、文化体験が心身や組織への愛着に与える影響を評価した。
- ・ACK（Art Collaboration Kyoto）のような、国内外の方々と広く交流できる機会を捉えて、京都の工芸や地域文化を世界へ発信する機会をさらに増やすことが重要であると考えている。
- ・学校部活動の地域移行を契機として、これまで学校活動の枠組みに十分位置づけられてこなかった茶道・華道・能楽・祭礼等の文化活動を継承していく視点も必要であると思っている。

- ・新規採用職員向けいけばな研修は意義が大きく、管理職を含む幅広い職員が文化に触れる機会があればよいと考えている。
→事務局) ・いけばな研修は人事部門からも好評であり、対象拡大について検討していきたいと考えている。
- ・文化の価値は数値だけでは測れないものであり、その価値への理解を広げることが重要であると感じている。
- ・ACK の運営体制変更後の方向性に関心を持っている。
→事務局) ・ACK は複数の関係者による運営体制へ移行するが、事業の方向性は大きく変わらないと認識している。
- ・寛永行幸四百年祭は、京都の文化を改めて広く認識してもらう良い機会であると感じている。
- ・文化や芸術を特別なものと捉える傾向が強まっており、日常生活の中へ取り戻していく視点が必要。それが地域幸福度の向上にもつながると考えている。
- ・食文化が文化施策の中で十分位置づけられていないように感じており、今後の展開に期待している。
- ・和食や郷土料理などの食文化は最も身近な文化体験であり、文化への理解や関心を高める有効な入口になると考えている。食文化の魅力をより分かりやすく府民へ伝えていくことが重要であると思っている。
→事務局) ・食文化は重要な課題であると認識しており、今後の施策の中で検討していきたいと考えている。
- ・華道を生活文化として定着させるためには、継続的な体験機会が重要であると考えている。
- ・華道がウェルビーイングに与える効果について、中長期的な検証が行われることを期待している。
- ・ミュージックフュージョンが文化施策の中に位置付けられたことを評価している。
- ・地域に根差した音楽活動の普及と、世界で活躍する人材の育成が重要であると考えている。
→事務局) ・世界で活躍する音楽家と地域との新たなつながりが生まれており、今後も広げていきたいと考えている。
- ・8つの重点プロジェクト全体の進捗や評価の考え方について関心を持っている。
→事務局) ・順調に進展しているプロジェクトがある一方、課題に対して具体的な施策を示せていない分野もあると認識しており、今後も意見を伺いながら施策を検討してまいりたい。

- ・地域の文化資源の魅力の再発見や、祭礼の担い手同士が交流する場づくりが重要であると考えている。
- ・地域団体の主体的な活動と文化施策の連携によって、より大きな成果が期待できると思っている。
→事務局) ・地域の文化資源の魅力の再発見や次世代継承に関する新たな施策を検討している。
- ・文化体験は継続的な学びにつながる仕組みが重要であると考えている。
- ・若者や留学生の文化への関心は高く、その関心を地域文化の継承につなげたいと思っている。
- ・型友禅の型紙など文化資産と若い世代を結び付けることで、新たな価値創造が期待できると感じている。
- ・直接鑑賞や主体的な文化活動への参加がコロナ禍前を下回っており、危機的な状況であると考えている。まずは、大きな課題として共通認識を高めることが重要だと考える。
- ・ポップカルチャー表彰制度は、かつて文化庁で実施されていた「メディア芸術祭」に代わり、世界への発信力を持つ事業になることを期待している。
- ・寛永行幸四百年祭を契機として、伝統技術や伝統産業への関心を継続していくことが重要であると考えている。
- ・地域の歴史や文化を知ることが地域への愛着形成につながると感じている。
- ・文化活動への関心を高めるためには、良い文化体験が得られるよう支援するコーディネーターやファシリテーターなどの人材育成が必要であると考えている。やり方によっては体験機会が逆に関心の低下を招く可能性がある。
- ・大学生など若い世代の視点を活かした文化体験の設計が重要であると思っている。
- ・受験や就職に直接役立たないものは不要との考え方が広まっているが、文化活動は子どもの居場所づくりやウェルビーイング向上につながると考えている。
- ・文化政策と教育政策を連携させながら、文化活動の意義や効果をエビデンスで示していく必要があると思っている。
- ・観光向けの体験も入口としては大切だが、本物の文化体験を提供することが重要であると考えている。
- ・伝統文化の継承には地域住民の関心向上が不可欠であり、関心を持つ層に応じたアプローチが必要であると思っている。

- 寛永文化講座運営の経験から、興味を持つ人々への適切な情報発信によって文化への関心層を広げられると感じている。
- 分かりやすく伝える技術や編集力、発信力を持つ人材を育成することで文化がより良い形で広がっていくと考えている。